

令和2年度「地域連携担当者」等新任研修 開催報告

1. 目的 生涯学習・社会教育の専門的知識の習得ならびにコーディネート能力の向上を図るなど、社会に開かれた教育課程を実現する上で学校と地域を結ぶ指導的役割を担う教職員の資質向上を図る。
2. 主催 滋賀県教育委員会
3. 対象 市町立小学校・中学校、県立中学校・高等学校・特別支援学校において、「地域連携担当者」等の校務分掌に新たに位置付けられた教職員、またはそれに準ずる者
4. 開催方法 オンデマンド形式
5. 内容
 - ① 趣旨説明・「地域連携担当者」等の役割について
 - ② 講演
演題 「社会に開かれた教育課程と持続可能な連携・協働体制の作り方」
講師 橋本 洋光 氏（全国体験活動ボランティア活動総合推進センター コーディネーター）
 - ③ 「しが学校支援センター」の紹介

6. 配信期間 令和2年 11月9日（月）～11月30日（月）

7. 受講者数 129名



8. 概要 講師より、「社会に開かれた教育課程と持続可能な連携・協働体制の作り方」をテーマに2部構成での講演をいただいた。

第1部の講演では、「支援」から「連携・協働」への変遷について、社会環境の変化や国の示す方向性を基に、現在の動向について解説された。さらに、地域と学校の協働体制の構築に向けた法的根拠と、新学習指導要領に示された3つの柱から「社会に開かれた教育課程の実現」のために必要となる地域学校協働活動やコミュニティ・スクールの仕組みについて説明された。

続いて、鳥取県におけるコミュニティ・スクールの事例を参考に、地域連携担当者の具体的な役割を整理して示された。中でも、コーディネーターの役割が重要であり、実際の活動に参加する生徒への指導方法だけでなく、協働する大人への働きかけや、ボランティア活動を通して相互の関係がより構築されるため様々な工夫と御自身の実践について教えていただいた。

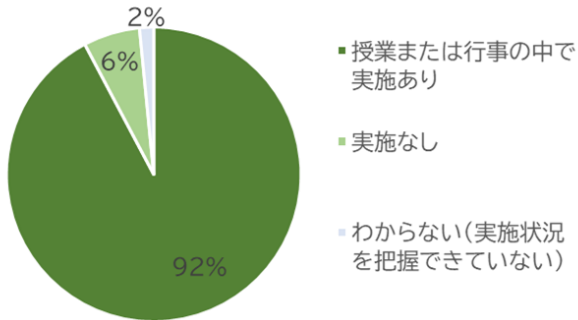
第2部の講演では、地域の教育資源を効果的に活用した学習プログラムの作成について話された。

中学校及び高等学校における実践事例を通して、「社会に開かれた教育課程」をどのように計画し、実行すれば良いかを話された。学習プログラムを作成する際は、子どもが活動の企画・運営に最初から参加すること、集団として力を合わせて何かを成し遂げる機会を作ること、他者との対話を通して自らを振り返る場面を作ることなどが大事であると示された。続いて、評価の仕方や発表の機会の計画、さらには地域貢献の視点を取り入れた活動の仕掛けづくり等のアイデアを紹介された。

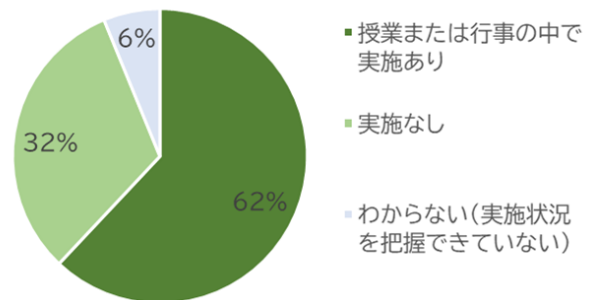
最後に地域学校協働活動の効果について触れられ、これから地域連携担当者として活躍される受講者へのエールを送られた。

9. 受講者アンケートの結果

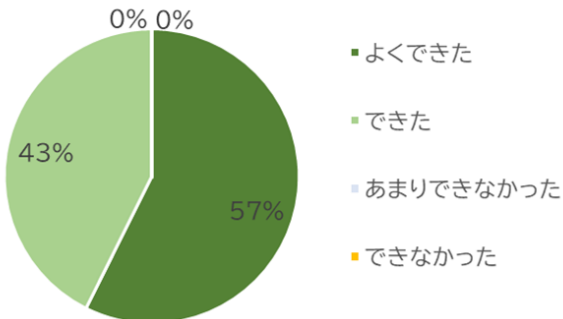
学校における地域からの協力・支援に関する活動の状況について (n=129)



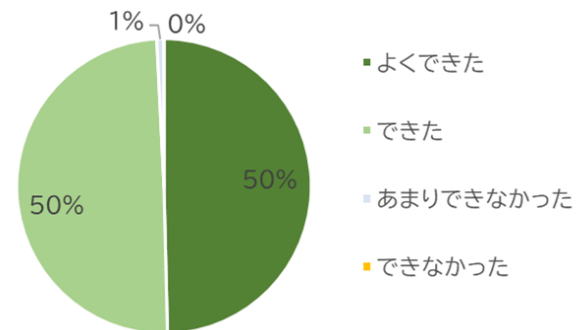
学校における地域への協力や支援に関する活動の状況について (n=129)



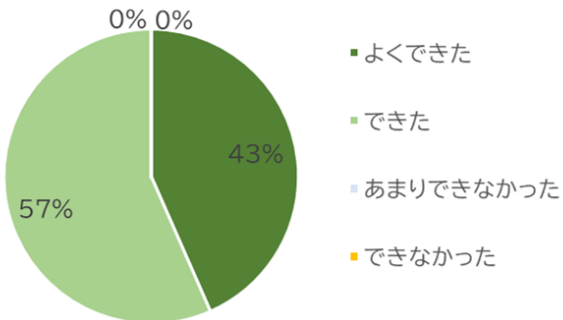
「地域連携担当者」としての役割の理解について (n=129)



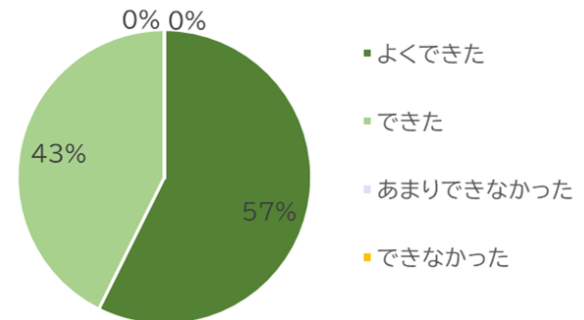
「社会に開かれた教育課程」の理解について (n=129)



持続可能な連携協働体制の作り方についての理解 (n=129)



「しが学校支援センター」および「学校支援メニュー」についての理解 (n=129)

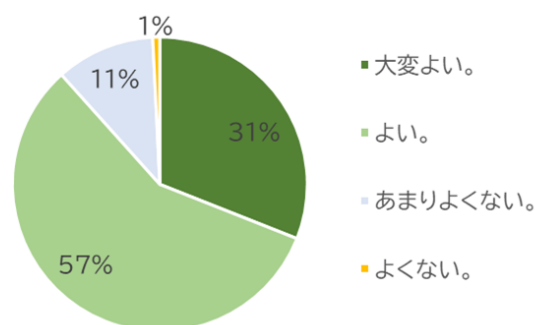


10. 本研修の振り返りより(一部抜粋)

○ 地域連携を活性化する上で、まずは学校運営協議会の立ち上げからと考えているところではあるが、本研修の内容がとても分かりやすかったので、一部を活用しながら、校内の共通理解を深めていきたいと思った。

「学校支援メニュー」については、これまでに本校でも活用している部分もあったが、本研修での説明を聞いて、もっと活用できるところがあるので感じたため、校内でも啓発して活用を促そうと思った。

オンデマンド研修の実施について (n=129)



○ 日本のみならず、世界各国の地域連携による学校づくりや教育課程、具体的な学習活動についてご紹介いただき、大変参考になった。勤務校でも、学校運営協議会・地域学校協働本部を主軸にしながら、地域みなさんに学校教育に参画していただく動きが盛んになり、定着してきていると感じているところである。コロナ禍により、サービスラーニング（子どもたちが地域へ）の動きが取りにくい昨今ではあるが、そうした活動を教育課程に位置づけ、地域とともに育ち、地域をつくる子どもたちに成長できるように、研修した内容を職員と共有したい。

○ 「支援」から「連携・協働」という柱の意味がとてもよくわかった。本校では、地域コーディネーターの方の協力のもと、各学年、様々な活動を地域の方と行っている。ミシンの学習支援や地域の方をゲストティーチャーに招いての地域学習、キャリア教育等たくさんの「支援」で子どもの学習が進んでいる。しかし、今回の研修を受けて、次の段階の「連携・協働」が必要だと分かった。

子どもたちが支援してもらっただけではなく、地域に貢献できることは何があるのかを考えていく必要がある。子どもの学習の中から、子どもとともに、地域への参画・貢献を考え、学びを深めていきたいと思った。

○ 地域ボランティアの方に学校で支援いただくことよりも、生徒が地域でボランティアをして、生きる力を育てるサービスラーニングの大切さを学んだ。現在の状況は厳しいが、生徒が地域で自己有用感を持てるような取り組みを、コーディネーターの方と一緒に考えたいと思った。

○ 体験学習とボランティアの違いについて改めて考えさせられた。自分のための学びに留めるだけではなく、他者志向の学びを通して内発的活力を生み出すような取り組みをしていきたいと感じた。本校は地域に根付いた学校であるので、地域ボランティア清掃などの取り組みがあるが、地域の魅力を伝えることや、生徒の生きる力までは養っていないのが現状である。そこで、学園祭を通して地域と関わっていき、模擬店の出店を地域の事業者と共同企画するなどして、お互い学びあえるものがあれば、持続可能な社会につながるのではないかと感じた。

学校における役割について

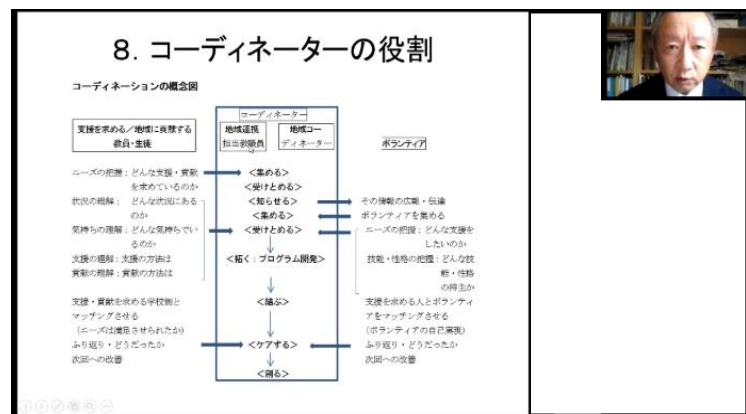
- ① 連携・協働のためのつながりづくり
- ② 地域資源の活用と校内体制の調整
- ③ 取組の評価や課題への迅速な対応
- ④ 打合せ時間の確保

【研修の趣旨説明】

学校と支援者で創る連携授業の一例



【県内の事例紹介】



【 Zoom を活用した講演の様子 】